
攫ったのは白

寺井団歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
攫ったのは白

【Nコード】
N8448W

【作者名】
寺井団歩

【あらすじ】
白い何かに乗った何者かに攫われ、一人異世界に色々と能力を付けられて捨てられた少年が頑張って生きてゆく、剣と魔法のファンタジー。

プロローグ(前書き)

黒瀬 俊 十五歳、高校一年生。

夏の夜の寝苦しさは、丑三つ時に散歩して。途中、目撃した白い何かに攫われた。

プロローグ

見上げる空の色は青、降り注ぐ太陽の光は温かく、手が触れている草の色は緑・・まれに赤紫。

聞こえる鳥の声は怪しく優しく、響く獣の声は凶悪に、鳴く虫の声は気味悪く。

其れだけでなく「ああ、此処は異世界」と、目の前にいる醜悪な生き物で少年は納得する。

夏の丑三つ時に散歩した、そんな何気ない因果で異世界に来てしまった。

「俺を攫ってここに放り出した彼奴は誰だったのか」幾千もタコ殴りにしたいと思う俺は悪くない。

日本海に面する田舎町の住宅地から、夏の夜の寝苦しさから丑三つ時の散歩に出た少年。出向いた先は大きな農業用水池、池とは言っても、ラムサール条約に登録された大きな池だ。

そんな池の土手を散歩している少年が見た物は、北の方角から飛んでくる白い何か。

池の真上に来たその白い何か「なんだろう」・・・UFOかな？。

そう呟いた少年は、そんなものを信じて居ないが、在っても不思議ではないとは思って居る。

プロローグ（後書き）

うう・・・難しいね。

漂う様な（前書き）

池の上に止まった正体不明の白、見つめていた少年は意識を失った。

第三者がいて見ていたとしたら、それは唐突に消えたと言証するだろう。そして、理由は分からないが、朝日が昇る頃池の水はおよそ七割程消えてなくなって居た事。

少年が行方不明になり、搜索はされたが見つからず、水と池との関係性も掴めず搜索本部も何時しか解散となった。

漂う様な

何かを感じる事が出来て、少年は自分が何処かを漂っていると感じて居た。どの位の時が過ぎたのだろう、さまざまな色のトンネルの中を漂っていると感じた。動けもしないし理由も分からないし、何故自分が漂って居るとかは分からない。ただ、自分の体が幾多の色のトンネルの中を漂い通って居る、そんな感じをしていた。

生まれた星での記憶は残そう、後はそれぞれ好きな様にの。

何かにか、誰かにか。身体をいじられて居る様な感じ、気持ちが悪
い。
恐怖や飢え、渴きは無いが、何故かもう家族の元へは帰れないのだ
と理解した。

言語と文字は普通に使える様に、まっ、この星は大きいけど交通に
不便な世界だからね。

あー、これの居た星とは随分遅れて居るな。

これの存在がどの程度文明を動かすか、極端には発展はしないだろ

うが。地域格差が出るかな。

ふん、格差などこの世界にもある。今さらだろう。

誰か達（前書き）

さて、そろそろよいじやない。

あの世界の一つの星がこれの新しい世界、さっさと捨てようぞ。

誰か達

誰か一「全ての攻撃魔法を受け、最強で使える様にしたぞ。魔力底抜けじゃが但し神は殺せん」。

誰か二「完全魔法防御・完全物理防御を受けたぞ、但し神からの攻撃は防げん」。

誰か三「ふふん、命以外なら、何でも作れる能力を受けたぞ。但し、これの住んでいた星に有った物以上の物は作れんがな」。

誰か四「何事も、運じゃ。どっちかに転がるじゃろうな、運の良さと悪運の良さをの、誰かの悪意は三倍反射、誰かの行為は倍反射」。

誰か五「良かったか悪かったかは、儂らにとつて知った事では無いぞ。狙った奴からは常に最高の物を盗めるように、又狙った相手が持ち物で最高の物を落す様に。ふふつ、盗まれたことも落したこともも気付かれずにな」。

誰か六「本当に傲慢な物いいじゃな、音楽と芸術の最高の技能を授けたぞ。但し、この星の者達が受け入れるかどうかは知らんぞよ」。

誰か七「うーん、そんなものが役に立つかは知らんがな。儂は金運と物運の良さをの、戦いで盗める物の量など知れた事よ」。

誰か一「神から盗めぬとは言わないのか・・・まっ、二度と会う事も無いから良いか」。

誰か八「おいおい、儂を忘れて居るぞい。儂からは飢えないと言う

幸運度最高の「

誰か二「それが何かの役に立つのか」

誰か八「絶対に食べ物、飲み物に飢えない、知識欲からも飢えない。どうじゃ、最高じゃろう」。

誰か三「何か微妙くと思うのは儂だけかの」。

誰か九「最後に成ったが、儂からは武技じゃな。武は魔法を使う上でも必要な技術、突然最強等は馬鹿だろう。戦えば戦っただけ強くなる、天才度最高も付けてやろうか。殺しへの精神的負担も最小限にしておこう、戦うと言う事は殺すこと、戸惑いは死」。

誰か一「それは儂への当て付けか、この場で戦っても良いのだぞ」。

誰か九「ふん、馬鹿とは戦わん、それよりさっさとそれを捨てるよ」。

誰か達（後書き）

この後、誰かたちは相争い、それぞれ何処かへ飛んで行ったそうなの。

喰われそう（前書き）

目の前の醜悪な生き物、これが何なのかは分からないが。ゲームの中に出て来るスライムのような、だが目の前に居る奴はそんな可愛げは無い。デカいのだ、高さだけなら三メートルは有るだろう。のしかかられたら一回で潰されるな。

喰われそう

可愛げの無いスライムのような生き物が、意を決したように飛びついてきた、食べ様と言う気らしい。

実際食べられた、が、ペツ そんな感じで吐き出された。

俺って不味いのかな、そんな馬鹿な事を一瞬考えた。俺は吐き出された時に手に触れた、野球のボールほどの大きさの石を手に立ち上がりそいつに叩き付けた。石はグジョっと言う音を立てて突き抜けた、どうも大したダメージは受けなかった様だ。そいつは又飛びついてきたが逃げれた、俺も馬鹿では無い、食べられそうになくても。殺されそうだと言う事は理解した。武器に成りそうなものは石だけ、どうも急所に当てないと倒せない様だ。ゲームの中のスライムって、確か体の中に核があったよな。此奴も同じなのだろうか、良く見ても分からない。そりゃそうだろうな、此処が自分の急所です、等と曝しているはずもない。

此奴に最初食べられた際、どうも消化液が大量に着いたらしく、又ルル感が堪らない。取り敢えず、物量作戦で行こうと石が大量に転がって居る方を見つけて逃げた。此奴、結構移動が速い、足も無いのに何故だと思う。見えない急所、ならば一番見えにくい体の色に向けてありったけの石を滅茶苦茶に投げた。どうやら正解だったらしく、其処が急所だった様だ、支えの無くなったプリン。グジョと崩れて行く、そして此奴からは気味の悪い色のガスが発生、同時に消えて行った。残された物は緑色の球体が四つ、触るとぶよぶよな感じ、お宝なんだろうか。だが今の俺には容れ物さえない、そう思ったら、目の前の空間が三十センチほど切れた。

「うお、なんだ是、あれか異次元空間倉庫やつか。マジゲームじゃん」

試しに石を入れてみた、そして念じた。「石よ出て来い」ぽろっと出てきた。

ポンとでて来た石を見て「うーん、そんな感じの世界に放りだされた、そんな感じなんかな」

「あー・・・、泣いてどうなるって言う訳じゃないだろうけど、俺って未だ十五の子供なんだよな、どうしてこうなったんだよ、説明位しろって」

少年は号泣した、訳も分からず知らない世界へ、その余りの理不尽さに泣いた。もう会えない家族を思い泣いた、是からの事への不安に泣いた。

喰われそう(後書き)

倒した相手は平原の最強で最凶スライム、ベヘンム、レベル40以上のモンスター

願えば叶う能力があったが、其れほどうまく使える訳が無い。(前書き)

黒瀬俊、「クロセ・シュン」十五歳。有り得ない理不尽に号泣す、その前に戦闘らしいことをした。

願えば叶う能力があったが、其れほどうまく使える訳が無い。

俊が泣き止むまで、幸いに猛獣も化け物も近寄らなかった。決して利口ではないが、馬鹿では無い普通の子の俊。何か、自分には能力が付けれられているとなんとなくわかった。その理由は分からないが、あれだけの沢山の石を投げて疲れもせず、肩をも痛めて居ない事実を考えればなのだが。きつと「俺を攫った」あの白い奴が何かをしたらんたろう。

「ん〜。こう、あれだ。ゲーム見たく、ステータスウインドとかスキルウインドとかカスタマイズウインドとか、パツと目の前に出て来ると嬉しいんだけど」グスグスと泣き止んだ後の、鼻を鳴らしながらの独り言。

そうは願ったが、物事そう都合よく行くはずもない。

「あ〜、まあ自分で一つ一つ確かめろって言う事かな」。

そう呟き、何時までも此処に居る訳にも行かないと立ち上がる俊、どちらへ向かえば良いのやら。

「こう言う時って、ゲームだったら探査魔法とか使っていたよな」とは言っても、どうやったらそんな事が出来るのか、俊には分からない事。

取り敢えず見た目低い様な地平の方へと歩き出した、目に映る樹の実をなんとなく食べながら。

「んー、レーダー輪に成って広がれ。小鳥や小虫に小さい獣は無視化け物は赤、獣は黄色樹は緑。道は白で表示せよ」。

キンコン・・・等とは行かなかったが、なんとなく分かった、勘と言えば良いのたろう。

丈の低い草地、栄養の無い土地が広がり、其れらしく生き物にも余

り出会わない。

「歩きやすいから良いけど、スニーカーに夏用パジャマのズボン、場違いの恰好だよなあ。上は無地のTシャツ一枚じゃあな、洗ったらずくに乾くだろうから。せめて小川辿り着かないとな、頭の先から何やらパリパリと。きつと一度食べられたからだろうな」。

割と呑気な独り言、多分沢山泣いたからだろう。

「しかし、襲われたのに武器も何も持たずに歩くなってどうなんだ、石ころだって無限にある訳じゃないぞ」。

そんな訳で、俊はキョロキョロ武器に成りそうな物が何かないかと探している。稀にアロエを巨大化したような植物とかが有ったので、食べられるか取って見た。葉肉が甘い香りがして食べられた、ラッキーだった。あとは低木だけど、ヤマモモの様な実の付いた樹とかが生えている、これは少しすっぱかったけれどさっぱりしていて美味かった。食べ物に関しては運が良いらしい、下手をすれば毒のあるものを食べて酷い目に遭っているはずだから。

武器に成りそうなものは見つからず、成り行きで歩いてみると、獣道の様な踏み固まった細い道に辿り着いた。此の儘左に歩けば、大き目の道に辿り着くと勘が知らせる。只一つの持ち物と言うべき、左手首の時計を見る、正しい時間を示しているかは分からないが、もう昼は過ぎた様だ。

それから一時間は歩いただろうか、幸いに危なそうな動物には出会わず。歩いて居る序でに魔法を使えるか試した、炎系魔術以外は使える事が分かった。てか、草原の真ん中で炎系は危ないだろう。そんなこんなで漸く広めの道路に出た、道路と言っても赤土が固まった様な道。馬車らしい車輪の轍もくつきり、壊れて捨てた様な馬車の残骸も有る。武器に成る、こん棒代わりの何かが手に入らないかと馬車の残骸に近付く。そして何か有用な物が有ると勘が知らせて

くる。

近付くと、馬車の下あたりに「おっ、剣だ」ゴリゴリと馬車をどける。有ったのは鞘に収まった一本の剣「カスタマイズ可能、低量ミスリルを含む剣」頭の中にそんな事が浮かんだ。

鞘から抜いてみた、さびも無く綺麗なままだ、何故馬車の下に有ったのか謎だ。鞘にもなんの飾りも無く、持ち主を特定できる目印は見つからなかった。柄を含めた長さは90センチ位だろう、両刃の両手剣、ロングソードと言っているのだろう「おー、ゲーム見た位じゃん。よし、雷属性最大付与」って「俺出来んのか」頭の中で落雷中の画像を思い浮かべると、剣の中に自分の中から何かが入って行く様な感じがした。「雷属性付与完了、魔力自動補充機能付与完了」おー不思議、俺マジすげえ。

道すがら、色々と拾った。肩掛け剣用ベルト、錆びたナイフ。弦の無い弓、矢の入って居ない矢筒。一メートル位の金属の棒、杖兼用の武器だったのかも知れない。弓の矢は、不思議な事にあちらこちらで拾う事が出来た、きつと戦いが有ったのだろう。

其れよりも「道が有るのに只一人とも出会わないのは何故だ」。

俊はそれと川に出合わないのが不満だ「身体くせえ、着ている物洗いてえ」と喚いて居る。

トボトボと歩いていると「この先に川」と、勘が知らせる。

「うお」の、奇声を上げて俊はひた走る。

暫く走ると、石橋が渡って居る幅二十メートル程の小川が見えた。如何に魔法を最大限使え様とも、使い方を知らなければ宝の持ち腐れ。「あつ、魔法で水を出して洗えば良かったじゃん」。

俊は、なんと残念な子、川辺でがっくりと落ち込んだ。

願えば叶う能力があったが、其れほどうまく使える訳が無い。(後書き)

なかなか人と出会わない、面倒だからしばらくは出合わさないかなあ〜。

出会った夫婦は元冒険者、そしてその元仲間達。(前書き)

河原で暫く落ち込んでいた俊、ノロノロと立ち上がり衣服を洗った。勿論下着も、どうせ誰も来ないだろうと言う勝手な希望で。

出会った夫婦は元冒険者、そしてその元仲間達。

川からは怪しい生き物は出て来なかった、きつと居るのだろうけど出て来なかったのは幸いだった。

「まさかなあゝ、すつぽんぽんで剣を振り回すなんて勘弁だ」。

洗った衣服が乾くころ、やっぱ俺って一寸残念な子。

「魔法で温風だして乾かせば直ぐじゃん」。

又落ち込む俊だった、まあ、使い慣れない魔法と言う事、何気に使える事を忘れるんだろう。

誰かが近づいて来ていると勘が知らせる、服を着て（パジャマのズボンとTシャツだけ）待つ。

ガラガラと車輪が出す音が聞こえる、どうやら馬車の様だ。矢張り馬車だった、御者台に二人、荷台に四人乗って居た。剣を持ち立っている俊を見て、御者台の二人と、荷台の前二人が警戒の目を向けてくる。御者台に乗って居る男性が、馬車を降りた。四十を幾つか過ぎた年齢だろうか、俊に一人で近づいてくる。

「坊主、一人か」。

「うん、見た通りだよ」。

「何処から来たのか知らんが、良く魔物に襲われずに無事だったな！」。

「あゝ、一度食べられたけど、美味しくなかったらしくてペツてされた」。

「なんだと、何に食べられて無事だったんだ？」。

「名前はわかんないけど、なんかブヨンブヨンしたでっかいのに食べられたんだよ」。

「色はどんな色をしていた」。

「緑色の奴で半透明だったよ」。

「お前、そんなのに襲われて無事だった、どうやって助かったって言うか、お前が化け物か?!」。

「違うよ、世間に疎いド田舎の子供だよ（強ち間違っではないよな?）」。

「いやいや、毒持ちのスリーバに食べられて無事だった奴なんて居ない。そんな話が本当なら、充分お前は化け物さ。でっ、倒したのか?」。

「へー、あれの名前ってスリーバって言うんだ。急所に石を投げまくったら倒せたよ。うん、ほらこれ。倒した奴が残した証拠だよ」。

緑色をした、ブヨブヨのボールを男に見せる。

「石を投げまくって倒した、信じられん。お前、もう一度あの木に向かって投げてみる。あの木が倒れたら信じてやる」。

男は一本の木を指さした、太さは俊の三倍は有ろうかと言う、杉の木に似た樹木だ。

「おじさん、火事場の馬鹿力って知ってる」。

「其れに似た言葉は知って居るな」。

「だったら倒せなくてもさ、其れなりの傷を付けたら信じてくれな
いかな？」。

「良かるう、納得出来る傷を付けたらな？」。

「どの程度？」。

「石がめり込むとか？」。

「やって見る！？」。

俊は河原から石を拾って来た、そして男に示された木に向かい振り
かぶって石を投げた。

「バンツ」と、物凄い音を立てて石が木の中で弾け、ズザザツ、ド
オーンと木が倒れた。

「魔法でも込めたか？」

そう男が聞いてきた。

「弾けるっでは思っただけ、魔力なのかどうかは知らない？」

うーん、図抜けた能力は持って居る様だな。が、悪い感じの少年で
は無いな。六人も居るんだ、何かあっても対処できるだろう。

「俺達は此処で野営をしたい、構わなければ一緒にどうだ」。

「うん、良いよ。俺シュン、おじさんは」。

「俺はマカズ・ノカだ、元冒険者でな。この先二日程掛かる先に有る、ラーソーと言う街で宿屋兼飲み屋を女房と二人で開業する事に成った者だ」。

「街が有るんだ、付いて行っても良いかな？」。

「別に構わんぞ」。

マカズ・ノカは馬車の方に手を振り、馬車を呼び寄せた。

「坊や、凄いわね、石一個で木を倒せるなんて。わたしこの人の女房でパミー・ノカよ、よろしくね」。

「俺はシュン・クロセ初めましてよろしく」。

「みんな、この子シュン・クロセって言うんだって、とっても可愛い子よね」。

マカズはパミーのこの発言で、可愛いもの好き病が発症したと理解した。

馬車から降りてきた男達に、マカズは言った。

「街までお前達、我慢してくれ、あれが始まった以上手におえんからな」。

「其れは良いが、あの坊主耐えられると思うか」男達の一人に言われた。

「んー、坊主には迷惑料に宿を提供することに成るだろうな」。

「怪しいし、金を持って居る様には見えんが？」。

「スリーバの球を四つ持って居た、売らせれば金貨十枚は堅い、宿代の取りっぱぐれは無いだらう」。

もう一人の男がその言を聞いて、驚愕の表情でマカズに尋ねる。

「何者なんだあの小僧？」。

「本人は、ド田舎の世間知らずと言っていたな。信じなければならんだらう、スリーバの事をも知らないらしからな」。

マジかよ、そんな男達の表情に、マカズは苦笑するばかりだった。

夜中のエビ襲撃・・・エビって・・・ザリガニ？（前書き）

他の四人の男達は、夫婦の元仲間の冒険者なのだという。夫婦二人、つまりPTリーダーとサブリーダーの冒険者引退を切っ掛けに解散。同じく四人も引退すると言う。一人はギルドの剣術指南役へ、一人は運送業を営むとか。後の二人は、腕を買われて街の衛士に成るのだと言う。

夜中のエビ襲撃・・・エビって・・・ザリガニ？

河原では、今まさに五人のおじさんと一人のおばさんに囲まれ、食事をしながら怪しい少年尋問会が開かれていた。弁護士は居ない。

「ほー、爺さんと二人暮らしをしていたと。しかし、お前が言う方向は魔物の繁殖地だ。人が住んでいるなどと聞いたことは無いな、それに、俺は宿を開くのだからそれなりにギルドとかから情報を集めている。まっ、キルドばかりからでもないがな。だから、俺は街人よりあるいは情報通かもしれんぞ」。

マカズは、そう言って俊の顔を見ながらニヤリと笑う。さあ吐け、お前の嘘は解つて居るんだ、吐いて楽に成れ。そんな感じ。にこにここと笑っているパミーさんは味方？の様。

「ねえ、マカズっては何の真似。こんなに可愛くて綺麗なシュンが嘘を言う訳ないじゃない、例え嘘でも信じてあげるのが人じゃない」

そしてニヤリと笑い「可愛いと綺麗は正義よ」何処かの星で聞いたセリフをサラッと言う。

俺は「あゝ、パクリ・・・パミーさんどうやってパクツた、異世界間の奇跡かよ」そう内心突っ込んだ。

俺がサラッと突っ込み流した、俺へのパミーさんが言った科白の、可愛いやら綺麗やは。この場は関係なく別問題、人の美酷は人種と時代で変わるもの。一々無駄に突っ込んではいられないのさ、世界と星が違うし。ってか???なんかみんなどっかで聞いた見た様な！、あつ、そこ突っ込み禁止。

兎に角、明日は早い時間に出発する。もう寝ようと言う事に成り、俺への尋問はうやむやになった。俺とパミーさんは馬車の中で寝る

事に成った、一応俺は子供扱いなんだろう、タツバは百七十に届いているはずなんだけど。

情報、街の名前と国の名前。衛士・ギルド・冒険者。

エルラーカ王国、王家直轄領で東は海、俺が居たのは西の砂漠と言
うか砂丘のある手前の草原ビルー。

街の名前はラーソー、街中の人口は四万ほど。街の外の農漁村地には七万ほどの人口が有るとか、結構人口が多いので化け物の被害は少ないとか。其れは境界石と言う物が有るせいでもと言う事だった。

夜中、俺は何かの気配で目が覚めた。多分魔物が獣だろう、隣に寝ているパミーさんをゆすり起こしたが、不寝番だったらしいフリーダ・オルソと名乗った男が不思議そうに見つめてきた。

「何か川下から近づいて居るよ、なんか大きい見たい?」。

そう俺が言つと、不信そうに。

「マジかい?」

「どうやら本当見たいよ、フリーダ急いで皆を起こして。シュン、攻撃魔法使える?」

そうパミーさんが聞いてきた。

「なんとか、でも石を投げた方が早いかも?」

「そうなんだ、剣も使えて魔法まで。ポロリと良い事洩らしたわね」

「あつ、ずるゝ。大人つて大人つてえゝ。・・・あれ、エビ・・・エビ・・・でか・・・なが」

「あれは火属性のザリガニよ、エビ見ただけだね。水の中で暮らす癖に陸に上がると火属性の魔法を飛ばしてくる魔物なの、あの鉄

なんて業火を纏う火の鉄なのよ」。

「ふーん、名前ザリガニなんだ、でっ、あれ、食べられるの？」

「えっ、・・・あゝ、食べるって言う発想は無いかも！、あくまで魔物だしね」

「そうなんだ」

「何を呑気にくっちゃべってんだ、やつつけねえと馬を食われて俺たちや歩きに成るんだぞ。パミー照明上げろ」。

マカズの怒鳴り声が響く。

「あつ、怒られちゃった」。

「其れじゃあ俺が飛び込むから後よろしく」。

そう言つて俺は剣を抜き、火属性らしい真つ赤なアメリカザリガニの巨大版に向かう。抜いた剣からはパリパリと雷属性の光が走る。

「すげ、あれは魔法剣か」。

「良い剣だとは思つたけど、魔法剣とは気が付かなかつたわ」

「おい、もう一匹来たぜ、やべえー！」

最初に近付いてきたザリガニに俺は突っ込んだ、勝てると言つたんの根拠も無い状態で。着ている服は夏用パジャマのズボン、上は半そでのＴシャツ、足元はスニーカー。そんな防御も何もない状態で死ぬ気だつたのだから俺は。ザリガニは触角を鞭のように飛ばし、口元には火がチヨロチヨロと出て居る。

飛ばしてきた触角を剣で受けると、感電したのかザリガニは驚いて下がった。俺はチャンスと思ひ、思いつきり地面を蹴り腹に一直線で潜り込んだ。幾ら大きくてもザリガニ、腹下の尾の部分が急所なのは一目瞭然。俺の雷剣を突き込まれ焼き切られた、川から上がったばかりと言う事も有つたが。比較的簡単に倒せた、剣道の代わりにやって居たチャンバラ剣法、結構役に立った。

もう一匹も、六人相手では分が悪かったらしくあっさり倒されていた。

「うー・・・これって結構美味そう、俺の勘は良く当たる?」。

俺はザリガニのミノの部分を舐めてみた「美味しい」そう叫んだら、六人とも何つと言う様な表情で近づいてきた。

「シユン、あんた食べたの、死ぬかもしれないわよ!」

「大丈夫、マジで美味しいから。パミーも食べてみてごらん、毒は無いよ、俺平気だし」

実の所、異世界人の俺は食べても平気かもしれないが、この世界のこの星に住む者達にはヤバかったのかもしれない、が、結果平気だったので良しとした!。無責任。

俺が倒したザリガニは、俺が知らんふりして食料にする為次元倉庫に放り込んだ。朝に成って、倒した証明の玉が見つからず一騒ぎになった。視線が痛い気のせいじゃないね。

「気にしないけど」。

夜中のエビ襲撃・・・エビって・・・ザリガニ？（後書き）

あゝ、街まであとの位だっけ。

一般常識の勉強・・・多分。(前書き)

剣の事で、色々根掘り葉掘り聞かれたが。元は爺さんから貰った剣に、俺が魔力をつぎ込んで強化しただけだと突っぱねる。やはり物知らずで、俺は色々墓穴を掘っていたらしい。

一般常識の勉強・・・多分。

「えーとね、知っているかもしれないけど。何種類もの魔法を使える人はざらにいるけど、一つ一つに魔力が分散されて、その分弱くなるの。あたしは二種類、光と火よ、でも使うのは光だけね。光には熱線を出す魔法が有るからね、だからあたしには火は必要ないの。って言うか、意識してそっちに回す様にしたら火の方は無くなった見たいなのよね。それに、そうした方が強い魔力と魔力量を確保できるでしょ」。

「そういう風に出来るのなら、俺もそうした方が良いのかな？」。

「んー、見た感じシユンはさ、魔力底なしって言う感じ？。見る人が見れば一発でバレルわね、まあ無責任な事を言うけど、そのままが良いんじゃない。一つに纏めたら災害級の魔力に成って、国家指定の暗殺対象にされるの嫌でしょ。色々出来る、所詮天才程度に収まって居れば良いと思うわ。例えば生産系の錬金術師とか、付与系魔術師とか？、結界専門魔術師とか？」。

「そっか、何も進んで手を血でぬらすことはないもんな。安全安心で、お金を稼げる魔術師か、いいかもしれないね」。

「おいおい、パミー、少年の夢を壊す様な話をするんじゃないよ。少年は夢をでっかく持つ生き物なんだからな」

「ふん、でっかい夢を持って、でっかい魔物に突撃して食べられたらお終いね」。

「あの、俺夢どつものと言う前にさ。一度食べられて、理由は分から

ないけど吐き出されたのな。なんでだかわかる、俺って不味そう？」。

「あつ、え〜・〜・〜。とっても美味しそうよ、でもねえ〜・〜・〜。あ〜・〜・〜。ほっほっほっほっ？！」。

不気味な様子に成ったパミーさんを放って、マカズの方に顔を向けると。

「きつと魔物的に食べられない理由が有ったのだろうさ、お前にとつては運が良かったのか悪かったのか、どっちに転がったのかは俺にはわからんな。兎も角売れば金に成る物を手に入れた、其れだけを言えば運が良かったんじゃないのか？。物事単純に考える時也需要さ」。

「そう言えばお金があ〜、俺ってさ、使ったことが無いからお金の事を知らないんだよね」。

何かから立ち直ったパミーさんが「あたしが教えるわ」と、言つて腰に付けたポーチの様な物から紐で口を縛った小袋を出した。

「お金の単位はジエン、金属貨幣しかこの国には無いわ。他国には寶石系の色のついた昌貨もあるけどね、それは大商人とか国同士の取引に使うだけだからあたし達には余り関係ないからね。まずこれね、鉄に赤銅を薄くかぶせたこの硬貨が一ジエン。この穴の開いた赤銅貨が十ジエン、青銅貨が五十ジエンだよ。鉄に銀をかぶせたこの硬貨が百ジエン、銀と赤銅を混ぜたのが五百ジエン。青銅と銀を混ぜたのが千ジエン、銀貨が五千ジエン。銀貨に穴を開けて金でふさいだこの硬貨が一万ジエン、金貨が五万ジエン、その上に白金貨があるけど其れは十万ジエン。夫婦と子供二人なら、金貨二枚の十万ジエンが有れば食べて行けるわ？。おとうさんにお小遣いが出る

かはわからないけどね」。

へー、メッキ技術が有るんだ。何処まで科学技術が進んでいるのかな？、いやもしかして魔法でメッキとかも有りそうだな。

「其れね、魔法でかぶせているのよ」

俺の心を読んだ様なパミーさんの声、ついこけそうになったのはどうしてだ？。

「当然だが、場合に依っっちゃあ昌貨以外での宝石で取引つてのも有りだぞ、ただし交渉が面倒だな」。

「でもさ、こんな金属のお金ばかりじゃ。重くて持ち歩くのに大変だよな」。

「あはははっ、どの国でも十歳に成れば金庫ギルドでカードを作ってもらえる、そのカードで何処の店や露店でも買い物できるぞ。金庫ギルドは何処にでもある、例えばだが山賊のアジトとか海賊船の中にもな、どうやったらそんな所に金庫ギルドがギルド員を派遣できて仕事に成るのは謎だがな。まっ、必要不可欠な組織な事には変わらん」。

金庫ギルドって・・・銀行？なのかな。カードって・・・えっ？・・・
嘘。

一般常識の勉強・・・多分（後書き）

硬貨、メッキ技術代わりの魔法、それって疲れないのかな。

不思議は何処の世界にもあるって言う事が、海賊盗賊・・・死亡率高そうだから金庫ギルド儲かるのかな？。

怪しすぎる程物知らず・・・ (前書き)

どれ程物知らずなんだ、少年滅茶苦茶怪しいぞ。

怪しすぎる程物知らず・・・。

金の事や魔物の事、木の実やそこいらの野の花の名前まで知らない。幾らなんでも有り得ないぞ、それにその着衣、それにその剣。シュンよ、誤魔化すのはもう無理だろう。

「シュン、言いたくはないが、そろそろ誤魔化すには無理が有ると思わないか」。

「あたしもそう思う。言いたくないのなら聞かなくて言うレベルじゃないのよね、シュン！」。

ふう、あゝ・・・まあな。無理は承知なんだけど、余り突っぱねると俺に不利な事に成るかも。仕方ないなあゝ、信じてくれるかどうかわかんないけど。悪い人達じゃない見たいだし、何とかなるかもな。

「んゝ、信じて貰えないと思うけど。俺、この世界の人間じゃないんだよ」。

ボソボソとこれまでの事を話す、証拠としてたった一つ身に付けて居た物。

。「これ、俺の世界の時を知る事が出来る機械、腕時計って言うんだかあさんの兄さん、俺にとっては伯父さんが。

「携帯で時間は見られるだろうが、携帯を持って行けない場所では便利だぞ」

そう言っつて、高校入学の祝いだと言っつて呉れた国産ソーラー腕時計。カタログの値段を見たら、ノートパソコンと周辺機器を買っても未だ御釣りが来そうな値段だった。とうさんにカタログの値段を指さ

して、パソコンの方が良かったって言った。次の日学校から帰ってきたら、机の上にノートパソコンがあった、当然ネットも出来る様に。「とうさん、伯父さんに対抗心持ってどうするよ」って言ったら、譲れん事も有ると威張って居た。

「もう・・・会えないんだよね」。

あんなに沢山泣いたのに、足元には涙の後が増えて行く。

「俺、この世界には爪の垢ほども何の縁も所縁も無い人間なんだよね。いや、身体を調べたら体の構造も違うかもね」。

草木一本、虫の一匹ともDNA的に関わりのない俺、この世界で生きて行つて良いのだろうか。「俺のせいで、この世界の文化や歴史が可笑しく無たら」。

「俺はそれ程大げさに考える必要は無いんじゃないか、現に俺達は今の所影響を受けてねえし」

そう、フリーダが言う。

「だな、悪い伝染病を持って居るのなら、とつくに俺達が可笑しくなっているだろう」。

「あつ、いやそれは、潜伏期間って言うのが有って・・・」。

「受け入れられないのなら、とつくにこの世界の神様が何とかして居たさ」。

そうマカズが言い、他の仲間も同意するように頷く。

「うふう〜、あたしが選んだ男だけあるねえ〜、良い事言っわ」。

マカズの仲間のセーズ・トリゴと言う男が言う。

「この世界に来てこの星に落とされて、今も未だ生きている。確かに縁も所縁も無いつて言うのは本当だろうけど、生きて居られたら困るのなら、落ちてくる途中弾かれるか殺されて居るさ。そうならなかったのも、今こうやって同じ言葉で話しているのも、受け入れられていると思っただけいい、とだな」。

「おー、滅多にしゃべらないセーズが長つたらしい言葉を吐いたぞ、それも臭そうな科白も」。

「あら、喋れたんだ？」

「パミー、仲間としてそれは酷くないか？」。

「あー、ごめん、話しているの見たことが無かったから？」

「何を言っただよ、戦闘や報告事ではきちんと話していたぞ」。

「あつ、いいんすよ。俺ぶっさいくだから、姐さんが俺に興味なかっただけっすから」。

ピッキーン。そんな感じで場が固まった。セーズさんて、俺から見れば渋い感じの風貌だし、体系だって細マッチョな感じで悪くないと思うけど？。女の人から見ると・・・なのかなあー。

俺が異世界から来たと言う事は、全面的に隠し、秘密にすることを皆は約束してくれた。要らない騒動に巻き込まれたくない、って言う事も有るだろうけどね。

パミーさんの余計な一言で場は壊れたまま、馬車はラーソーの街へと走り出した。

「シユン、俺達二人はもう宿は買って有るんだ。この世界の事を知る勉強がてら、良かったら給仕を遣らないか。宿の部屋の掃除や食堂の手伝い、夕方は酒場に代わるからその手伝い。否なら普通に客でも良いぞ、その代わり当然だが宿代は取る。手伝うなら食と住は保証するぞ、狭い部屋しかやれんがな」。

俺はパミーさんの顔を見る、ふう〜、もうちょっとだけ玩具に成って居ないと駄目なのかな。

「ん〜、シユン。ちゃんと公私は分けるわよ、で、ないと旦那に叱られるし。ふふふっ」。

「マカズさん、パミーさんよろしくお願いします。それでは呼び方はどうしますか」。

「俺は厨房と酒の面倒を見るし、後用心棒も兼ねるからな。普通にマスターでいいんじゃないね」。

「ふふっ、あたしはママさんで良いわ。宿の方と食堂の面倒を見る事に成るわね。厨房に料理人を一人、宿と食堂に一人女の子を雇って有るの、今は彼女が出来る範囲で準備をしているはずよ。帰ってから十日も有れば開業出来る計画なの」。

「シユンは何か特技は有るか、宿とか食堂厨房関係でだかな？」。

「うーん、こっちの宿ってどういいう物か知らないから。特に何が出

来ますってはいえないよ」。

「あー、確かにな」。

食と住を確保できたのは、俺にとってはとても幸運な事。異世界人とばれたのは運が悪かった事なのだろうか、食と住を確保できたのは幸運と言えるよね。後は同じ雇われ人の料理人と女の子が良い人である事を祈るしかないね。ばれないように頑張らないと、物の固有名詞、絶対同じとは思えないしね。

怪しすぎる程物知らず・・・（後書き）

最後の野営、明日の夕方にはラーソアの街に着くとか。俺が一人増えた分少し食料が乏しい見たいだったので、ザリガニを倉庫から出したら。何処から出したと詰め寄られた。あー、そんなのが有ったのなら、どれだけ助かったかと全員に泣かれた。当然これも内緒の約束さ。

チートすぎだろ(前書き)

何故か知らないが、彼らはどうも野音地に近付くと襲われるようだ。

チートすぎだろ

「なありーダー、こんな状態は今夜で終わりだよな。今まで七八割このパターンだぜ、誰が悪いんだと聞きたいもんだ」。

そう言ったのは、衛士に成ると言った片割れの、ゴバース・ハンブ
ンと言う男。

地球でいう、オオカミの様な獣がずらりと百匹は居るだろうか？。
引退前の冒険者である彼らはやる気が無い、下手を討って怪我なん
かしたくないって言うのが人情。目の前にいるのが人でないから当
てはまりそうもないけど。

「殺さずに、追い払う方法は無いもんですかねリーダー、魔物なら
やっちゃうけどさ」。
そうゴバースが言う。

「ねえ、フリーダさん、元冒険者って言っていたけど。未だ現役の
冒険者と違うの？」。

そう聞いたが。

「気分はもう元冒険者なんだよ、引退が目の前なんで全然やる気が
出ないと言うか！」。

「それってヤバくないですか、気が緩み過ぎて此奴らに食べられま
したって言うのは笑えないと思うけど!？」。

「だよなあ、シユン任せた、殺さなくていいからなんかやれない

か？」。

「ん、例えば、死なない程度の雷を獣に・ドカンとか？で良いのかな」。

シユンがやる気の無い様に言った一言で、ビシー・バリバリバリツと獣たちに落雷した。オオカミのような奴らは、ギャンギャン言いなから逃げて行った。

「ハイ！はい」。

「なんだ？」。

「シユン、何かしたの？」。

「あ、軽く言っただけで雷落ちた！」。

「シユン、絶対それを誰にも言わないようにね！駄目よ言ったら駄目よ。国軍に徴兵されちゃうからね。言葉を軽く発しただけで普通魔法は発動しないのよ、あ、信じられない、なんていう子なの」。

「魔物に食べられたが吐き出されて倒した、雷属性の剣であれに勝った。でっ、今度は無詠唱で獣に雷落とすってか。シユン、もう何もするな、存在がヤバすぎる」。

ゴトゴトと歩く馬車、その御者台の上に夫婦二人。

。「ねえ、マカズ、シユンと出会ったあたし達って運がいいと思う?」
。「あー、気の持ち様じゃないか。お前にとってシユンは旅の道ずれには幸運だろうし、俺らも不思議な話が聞けて退屈にはならん。それに、戦いだって積極的に守ってやる必要のない強さだしな。そうは言っても十五の子供だ、まっ、お前も気に入って居る様だし、俺らの子供代わりに面倒見るさ。其れに、ここで捨てたら俺達夫婦の名が廃るってもんさ」あはははははっ。

。「流石あたしの選んだ男だねえ、惚れ直したよ」。

シユンは馬車は尻が痛くなると言って、剣を担いで馬車の隣を走っている。其れを見ているフリーダとゴバース、かなり長時間走っているシユンを見ながら。

。「なあゴバース、シユンは見掛けに寄らずげえ体力だな、あれなら大規模な戦闘に参加してもやっていけるぜ」。

。「はん、フリーダよう。団長夫婦がそんな事をさせるものかよ、二人ともすっかりシユンに入れ込み始めて居るぜ、その内養子とかって言いだすんじゃねえのか」。

。「あー、良いかもな。子供はいねえ二人だし、親は居るけど帰れない所に来ちまった子供。ある意味そうなたって不思議じゃないだ

ろう」。

「ああ、それには賛成だ。しかし酷い事をする奴も居たもんだ、ろくな死に方をしねえだろうな」。

。「はっ、おいゴバース・・それをしたのは神かも知れないんだぞ？」。

「それでもだ、言いたくなるじゃねえか」。

「ふー、・・まあな」。

チートすぎだろ(後書き)

二人にちょっぴり良い事が有ったとか無かったとか。

ラーソ一の町1（前書き）

未だ目視は出来ないが、流石に街へ近づくと魔物やら獣やらも出て来ない。不確かな感じだが、人工的建築物の存在を感じる。

ラーソーの町1

エルラーカ王国、東部に有る海に近い王国直轄領、少し離れた位置に外国との交易もするカモロと言う港町をも抱えた中位の有触れた田舎町。町の内外合わせた人口は12万前後、町の中の人口は四万程だとか。改めて聞いたが、この王国の直轄領の名前はレイーシュ、初代国王生誕の地だと言う。

要らない情報と思ったが、王国の人口は2800万程で、王都の人口は600万位だとか。当然王国なので王族・貴族が居る訳で、この街にも貴族は徘徊していると言う。知らないで争そい事に成った時、稀だが無礼討ちも有るのだとか。低位の貴族なら心配ないがとマカズが笑いながら教えてくれた。

「俺も男爵家の四男で、食えないから冒険者に成った。パミーは隣国出身なんだけど政略結婚を押し付けられそうになって逃げた貴族の娘さ、位階は聞いてなてけどな」。

「逃げたしたんだもの、そんなの意味ないしね。でも、実家にはしつこく追いかけられたわ。光魔法を使える魔術師って、居ない訳じゃないけど、結構珍しいから」。

「まっ、貴族の生まれと言っても。今俺達二人は貴族じゃないし、王国に忠誠を誓っている訳でも無いし、単なる自由な国民さ」。

「あたしもマカズと結婚した時からこの国の自由な国民、生まれた国とは縁はもう切れたわよ」。

「ふーん、じゃあ実家からはもう追いかけていないの？」。

「ほほほっ、当然よ、もう結婚して二十年になるもの」。

「はははっ、十年はお嬢様と違って爺様に追いかけられたがな」。

「そうねっ、もう想い出位にしかなくていいわね」。

「この国の貴族は、公爵を筆頭に侯爵・伯爵・子爵・男爵・爵と有る。一番下の爵と言うのは、肩書だな、軍や学問・芸術・技術等に貢献をしたと認められた平民向けの物だ。この王国にしかない制度なんだが、なかなか王国も遣るじゃねえかって国民には思われていくるな。言葉でおだてるだけでなく、一代限りの肩書だが形としてくれるんだからな。穿ってみれば遣るのは無料だし、本人を喜ばせればもっと頑張るだろうって言うだけの話さ」。

「それにこの王国は変なのよね、領地を持たない王族だとか貴族だとかも居るのよ。名誉貴族とか臣籍降下しない王族とかも居るし、まあ、本人達も楽だからそれで良いとか言ってるけどね」。

「楽でもないだろう、名誉を遣るから軍学を学んで兵を率いるとか、芸術技術か学問に貢献しろとか。無領地男爵なんて軍の下級将校で魔物退治に走り回っているしな、実質平民出身の方が出世して居るぜ？」。

「ふふっ、この国はある意味実力主義なのよ、高位貴族だからって無駄に威張って居たら潰されるの。今代の王の手で公爵家が一家、伯爵家四家、子爵家二家取り潰されたわ。シュンの国には貴族は居なかったの」。

「昔は居たけど、今は天皇家とその一族くらいしか居ないよ、政治

や軍事への実権はない。今は国家の象徴的立場だよ、後は全て平等な国民、でもまあ立場で偉そうにしている色々な人も居るし。外国には貴族だっているし、そんなに不思議とは思わないよ」。

へー、王が国権を持たないのか。どうやって国を動かしているんだろうな。まっ、今はいいか、知ったところで俺には関係ないし。

そう、マカズは話を止めた、やっと城壁が見えて来たからだ。

「シユン、今見えているのが第一防護城壁だ。全部で城壁は五つ、その奥がこの街の行政府だ、首長は無領地伯爵位のリツケン・バーゼル・セーデンデ閣下だ、会う事等無いけどな」。

そんなこんなと話をしていると、防護城壁の前に来た、当然沢山の人達が居る。

ラーソンの町1（後書き）

あー、難しい、関係ない方の話ばかり書いて居る様な。

ラーソ一の町2 (前書き)

城壁が五・・・多いのか少ないのか、王家直轄領だからなのかはマカズも知らない様だ。

ラーソーの町2

ラーソーの町は平野にある、町の背後になる西部にはかなり大きな川が二本有るのだと言う。門の真ん中に城壁程の厚さは有るだろう石積が縦に建っている、片方の広さ二十メートル位で合わせて四十メートル。防護壁の前にはご丁寧に空堀がある、落ちたら絶対死ぬと思う、堀のその幅も四十メートルは有るだろう、橋は木の橋で何故木の橋との理由も何となく分かった。これが五か所、どんだけの用心だよなと思う。まっ、魔法のある世界、これでも足りないのかもなとも思う。門外の両脇に一個小隊位の人数二十人ちよいの人が分かれて立っている、交代要員を入れて一個中隊程度が警備しているのだろう。と言う事は、と聞いたたら。

「あははっ、第一の防護壁だからこれだけいるのさ。五ヶ所全ての入り口に、警備をこの人数で置いたらこの街程度の人口では養えない位の人数に成るさ。この領には四ヶ所城外に王国衛兵部隊の駐屯地が有る、他国の軍事的脅威や魔物の攻勢でも有ればそこから部隊が派遣されて来る。だから後の四つの防護壁の入り口には三交代で二人が立っているだけさ」。

「犯罪の取り締まりとかは」。

「衛士とは違う警邏隊と言うのが有る、着ている服の色が違うから一目で見分けられるぞ。ちなみに立場は警邏隊の方が上だ、衛士は犯罪者の捕縛は出来るが尋問等は出来ない決まりに成って居る。捕まえたら警邏隊員に引き渡すか、それが面倒なら酷く抵抗されたとか言っつてぶった切るかな。住民の目の前ではそつも出来んが、見て居ないならありなんだとよ」。

「えっ、そんな所に二人は入るの」。

「この二人は衛士と言っても内務監査関係さ、読み書きできるし計算もそこそこできる、その上戦えるんだしな。入隊と同時に衛士隊将校様だよ、年齢制限に引つ掛から無くて良かったよな」。

「年齢制限って」。

「試験が有ってな、読み書き計算と二十七歳以下である事なんだよ。二人とも試験を受けた時ギリギリでな、受験年齢が二十六、合格発表時二十七歳でな、二十七歳ギリギリだったって言う事さ」。

「えっ、二人とも未だ若かったんですね。俺、もう三十半ばくらいかって見てました」。

前に居た二人が「ギロ」っと、音がする様に睨んできた、怖く。

そんな話をしていると、順番が来た。マカズがギルドの鑑札を見せ。

「子供を一人保護した、名前しか覚えて居ないので記憶が無いのだろうと思う。俺と俺の女房が身元保証をする、街入りを許可してほしいのだが」。

「一番詰所に行って仮許可証を貰って呉れ、子供だが金貨一枚の保証金が必要だ。正式な手続きが終わって、居住許可が降りたら保証金の半分は戻る、後の半分は死亡するか街の住民で無くなるまでの住民税だ。ただしこの子の親か保護者がこの街の者だったら全額返金される」。

「分かった」。

一番詰所に馬車を回し、夫婦と三人で詰所に入り。マカズが又説明すると、簡単に仮街入り許可証がもらえた。馬車に戻りマカズに聞いた。

「なんで記憶喪失のって言う事にしたの？、まあ聞かなくても分かった気がするけど確認の為」。

「ああ、幾らなんでも異世界人で、何か分からない連中にこの世界に捨てられた子ですって言って信用されると思うか。馬鹿にされたって、下手をしたら切り殺されるわな。魔物も居る世界だ、襲われた恐怖で記憶を無くする子供も結構いるのさ。大人だったら、どこかの国の間諜とか疑われるかもで一時的牢入りの恐れもあるがな。お前は子供だ、それに俺達夫婦が生活の保障する、ならば犯罪には走らないだろうとな。ギルドカードには人数が書いてあるし」。

「成る程、機転がきくんだね。頭いい」。

「褒めてもおだてても何も無いぞ？」。

「なんだ、損した気分だね。」

「こいつめ」。

馬車の上で、こんな他愛のない事を言いあえて笑いあえる、たった二日と少しの時間なのに。これ程親しくなれるなんて思いもしなかった、人に恵まれた、神には恵まれなかった様だけど充分だと思つた。

「この恩、返せるだろうか？」そつとシユンは呟いた。

レーザーの町2(後書き)

広さや高さ・重さはメートル・キログラムで表記します。理由、忘れるし面倒っしょ。

ラーソーの町3（前書き）

「半金が住民税って」。

「態の良い賄賂だよ、裏金作って飲み食いだってよ。毎月人頭税は取られているんだ、住民税云々は良い訳さ」。

「二人とも、頑張って廃止させるよな」。

「頑張るっす」

ラーソーの町3

防護壁の間隔は一キロくらい、中心には官公庁と首長の公邸と官公庁の長達の公邸が置いてある。当然広い庭園公園付きで、警備も厳重だ。その外側に中級官僚たちの家が並び、何故かポツンとラーソー町立図書館が有り、衛士隊と警邏隊の本部建屋が並んで建っている。官公庁舎向けの商店や町立の病院も有ると言う。

「聞いた感じだと、町って言うより市と名乗った方がしっくりくるんじゃないのですか」。

「そうなんだがな、まっ、陛下の拘りでそのままなんだよな、拘りの種などなさそうなんだけどな？」

防護壁一番外側の方から、衛士隊屯所・警邏隊屯所工房系農民系の住民居住区、次が商店街と倉庫、色街、次が商店街系と中級以下の官僚の居住区の様な感じで展開しているらしい。広さは、街の中はまだまだ余裕だと言う。

大都会でないので目立たないが、やはりホームレスは居る様だ、堀の外のスラムに数十家族は居るし。街の中には浮浪児もいる、守る者が居ない者は街の中で隠れ住む事は黙認しているそうだ。但し犯罪を犯せば堀の外へ追いやられる。

「町立の孤児院もあるが、どうしてもなじめない子はある。そんな子たちは、商店街でも農工街でも何かしらの仕事をさせて面倒を見ている。悪さをしなければ安全に暮らしては行ける、表面上はそうなって居るな」。

マカズはふくつと息を吐き出し「裏を言えば、なんの因果か奴隷や色街に売り飛ばされるのも居る」。

「奴隷が居るんだ」。

「まあな、犯罪奴隷・喰えなくて自己売り奴隷。それ以外は禁止されている。だが他国へ売り飛ばす為の奴隷商人はいる、連れてくる奴隷商人も居る。どちらも国の鑑札を貰って居れば売買できるのさ、堀の外の奴らとかの子供は攫われやすいな。郊外の農家やその他の家の子たちは村単位で保護されているが、奴らは別だ。犯罪者とその家族、妙な括りで差別されているのが実情だ」。

「マカズさん、人族以外の者はどうなっているの」。

数は多くないが、明らかに人では無い種族が歩いて居る。

「一言で言えば、神との誓約で奴隷なんかには出来んのだ。只、政治中枢には入れないが、軍人とか農工商には沢山いるな。俺達のような者は、彼らを差別したり酷い事をしたら何時の間にか土の下って言うのが多いな。街の連中は比較的仲良くして居る様だ、酒場で喧嘩をしない様に気を付けている、簡単には勝てない相手だしな」。

「やはり身体能力は滅茶違いますか」。

「ひ弱そうに見える奴でも、人族の1？5倍は力が有るぞ。だから後は傭兵や冒険者、狩人に多いな」。

「ねえマカズ、ギルドが先、家が先」。

そうパミーが割り込んでくる、今静かなのが不気味だ、シユンに何を仕掛けるつもりか。マカズは笑っているが、人妻って事を強く自

覚してほしい、そう願ってため息を吐く。

「シユンを冒険者ギルドに登録するからギルドが先だ」。

ギルドらしい建物が見えてくる、看板の文字が読めるのは嬉しい。文字が読める読めないでは随分と違うだろう、悪気は有っても色々なこの能力付けてくれたのには素直に感謝し様。

馬車から降りて、マカズと一緒にギルドに入る。ギルドの中は入り口が建物の真ん中にあり、正面には案内嬢らしい黒兔さ耳のお姉さんが居た。

うおおおお、黒兔さ耳だあ、なんかすっげえ、種族は何に成るんだろお〜？

シユンが一人興奮していると、マカズが「ビット族だ、見た目より短気だからな」と教えてくれる。

見た感じ、長い耳以外人と同じに見える、兔さ尻尾は有りだよな。

「そこ、坊や、尻尾は無いからな」。

何かピンと来たらしく、受付嬢がシユンにそう言ってくる。

「えっ、無いの・・・反則だ？」。

シユンは思わず言っただけで仕舞った。

「だから何、坊やの為尻尾はあるのか？」。

「えっと、其処までは言いませんけど、すっごく残念な・・・？、世の中儘なら無いよねマカズさん」。

「シユン、俺を巻き込むな、眉間に青筋立てたリンカ嬢には殴られたくないぞ」。

。「あっ、リンカさんと言うんですか、俺シユンと言いますよろしく」。

「あっそ、でっ何ナンパしてくんのよ、此処は受付よ、聞くこと違うでしょ」。

「まあまあリンカさん、この子自分の名前しか覚えて居ないので、だから許してあげてえ〜」。

何時の間にかシユンの横に立ったパミー、覚えて居ないも何も、何も知らないのが本当だ。

「えー、パミーさんらしくない。．．．どこで拾ったの、見た目は良いけど残念な子なのね」。

「受付で騒いだらギルド長に注意されるぞ、リンカ嬢さつさとシユンの登録を頼みたい」。

「なんだ、新規登録ね。じゃあこのカードに項目ごと書いて、書いてらもう一度ここにきて。分からないことが有ればお二人に聞きなさい」。

日本語で書くことにこの国の文字らしい物に変換され、又自分も読める、何故そうなのかよりも何故なのだと思うシユン。軽く遺失感を覚えた。

ラーソーの町4 ギルドで(前書き)

シュン・クロセ 15 そこまで書いて手は止まる、
遺失感から涙
が零れる。

ラーソーの町4 ギルドで

シユンの涙を見た受付嬢、リンカが慌てる。そりゃそうだ、シユンの涙を見た夫婦がカリンを絞殺さんばかりににじり寄る。「何うち
のシユンを泣かしている(の)」「」。

「わ、私のせいなの、ち、違うでしょ」。

「シユンの前に居るのはあんただけだ」。

「だからシユン泣かせたのはあんただけ、リンカ嬢覚悟は出来てい
るだろうな」。

「わー冗談じゃないわよ、この子が勝手に涙を流したのよ、それが
なんで私のせいに成るのよ!?!?」。

「あつ、二人とも落ち着いて。字が書けて読めるのに驚いたのと安
心したからだよ、ほら、読み書きでなかったら宿の方のお手伝いも
出来ないだろうから」。

「ああそうか、そう言う記憶は有ったんだな」ひそ?後でどうい
う事なのか教える?。

「あらあら、あたし達二人の早とちりだったのね。ごめんなさいね
リンカさん」。

「いいです、でもビビりましたあゝ。冒険者ギルドランク7のお二
人に迫られたら」。

「いやはやすまん、俺も詫びよう、怖がらせて悪かった」。

「俺もごめんなさい、不意に涙なんか流したて」。

「いやいやもう本当に大丈夫です、怒って居ませんから」。

カードには銀行ギルドの暗証番号がもう自動で付いて居る事、他人に見えるのは名前と年齢だけ。

ギルドレベル・個人戦闘レベル・魔法レベル・種族・特性・特技・称号・特殊身体付加名・武器防護付加名・単独付加等・他に預金額は本人が魔力を込めない限り表示されない。そして表示したい部分だけを表示する事も出来ると、そうリン力嬢から説明を受けた。

其れは良いとして、しかし、ギルド正面受付嬢が新人冒険者登録受付もしているのに改めて疑問に思ったので聞いたら。

「案外どころかとっても暇なのよ、新人なんて週に一人も来ない時があるの。正面受付って案内嬢みたいんだけど、このギルドが初めての人ってこれも少ないの。ましてお客さんなんてもつと来ない訳よ、だからこの程度の事は押し付けられるの」。

シユンのギルドレベル 1。

戦闘レベル 47。

「シユンのそれ、笑えるわ。ギルドレベルが1なのに、戦闘レベル47ってこの年齢ではこの国一番じゃないのかしら？」。

「お話は聞きましたが、決まりは決まりなので申し訳ありませんが此処から始まります」。

「別に構わないと思うわ、仕事は宿で雇う事に成っているし。もしもっとお金が欲しかったら、休みの時にクエストを受ければ良い事だしね」。

「じゃあこれで終わりなんだね、もう早く二人の経営する宿の方を見たいよ」。

「よし、じゃあ行こうか」。

ギルドから出て、マカズが聞いてくる。

「なんで涙なんか流したんだ」。

「あの時、生まれた世界の星で使っていた文字で書いたんだけど。直ぐにこの世界のこの星の文字に変換されていったんだ。あー、この国の文字なのかな。なんだか本当に自分の居た世界、星から切り離された見たいで悲しくなったんだ、だから」。

「そうか、この星で言うなら。三十四か国有ると認識されている、文字も四種だ。言って置くが、十年前から星は丸いと認識されているぞ、だから船乗りたちが新しい国々や新しい土地を見つけるのも当たり前になるだろうな」。

「そうは言っても海の魔獣は地上の魔獣より強いからねえ、其れに数が半端なく居るの。お蔭で炎系と雷系が使える魔術師は引つ張りだこさ、シユンも雷系使えるから誘いに来るかも」。

「そうだな、何か国が言っ来たら海に逃げるのも有りだな。この歳あのレベルだ、もっと何か隠している見たいだが、俺ら二人は知るべきでない様だ。十六に成れば大人だ、俺達の保護も要らなく

なるんだ。其れまでしつかり勉強をしな、ああそうだ、この街には魔法と武術の学校が有る。基礎しか教えて居ないから両方とも期間は一年だ、行く気が有るなら仕事の方も考えるぞ」

「む、そんなにポンポン言われても、ほらシユンも混乱している見たいよ。あたしがシユンをみた感じでいうけど、別に学校に行く必要は無いんじゃない。戦闘能力・魔力・どちらもあるの学校に行っても先生より強いと思うのよ。其れより、ギルドでクエストを受けて実戦で鍛えた方がよいと思うわ」。

「お、つとつとつと、話し込んで通り過ぎる所だったよ」。

「シユン、此処があたし達が経営することになった宿と酒場よ。あつ、酒場は朝と昼は普通の食堂だけだね」。

ラーソ一の町4 ギルドで(後書き)

文才ってか、日本語しらねえって実感した。

ラーソ一の町 宿の中で（前書き）

馬車を降りた三人、宿の部屋担当と料理人に出迎えられた。

料理人のドライド・四十代、料理助手のガラン二十代中程。ガランはドライドの弟子で、ドライドが事後承諾よろしく入れた人物。

宿と食堂兼任の女性、カロリーヌ二十代後半か中位。

ラーソーの町 宿の中で

俺の紹介とあいさつが終わり、マスターなマカズさんに、ママさんなパミーさん二人にカロリーヌさんからお願いの言葉が有った。

「パミーママさんマスターさん、調理場に追い回し二人位、宿と食堂に後二人欲しいのですが。シュウくんは夕方からの人員、こちらもシュウくん一人では大変では無いのでしょうか」。

「そうだなあー、追い回しは外回りの子で良いかドライド」。

「俺の知っている子で良いなら、知らない子は今一信用がなあー」。

「うん、当てが有るなら連れてきて、話はしないとな」。

「外回りの子って」。

そう俺が聞くと。

「話しただろ、孤児院になじめない子って言うの」。

「ああ、そうなんだ。俺も今の幸せな出会いが無かったら、そっちに行ったのかもね。改めてありがとう、俺頑張るから」。

涙ぐむ俺に、スツと寄ってくるパミーさん。

「シユンは涙もろいのね、涙もろい子は優しくて感情豊かな子、神様が特別に作った子と言われているのよ、色々な才能を持った子とも言われているわ。ひょっとしてシユンは何か料理や飲み物を作る

事が出来るのかな」

「んー、途中で食べた果物を使った飲み物とか。俺が戦って勝った生き物を食べた奴なら色々出来るかもね」。

「確かに、ザリガニを食べたのは多分シユンが初めてだろうが、あれは確かに美味かったな」。

「えー、ザリガニを食べたのか、川最強の甲冑魔物を」。

そう叫んだのは当然料理人ドライド、料理人として十歳から修行し、独り立ちを親方から十代後半で促された、修行の旅の途中で魔物に襲われたドライド。その時運よく助けたのは新婚旅行中だったマカズとパミーの二人、以後、何かできる事が有るならば絶対呼んでくれと言ったドライド。冒険者を引退して、宿を買い経営すると聞き、包丁を抱えて駆けつけた。だが修行中、魔物魔獣は絶対食べられない、食べたなら死ぬか自分も魔物に成ると言われてきた。それがあつさり目の前の子供に否定された、実際食べたのは七人、全員全然無事である。

「シユン、その話を料理人ギルドに持って逝け・・・あつ、字が違った、行けだ。持って行けば一割は権利として十年間その食材を使った料理の代金を受け取られる、たった一割と思うなよ」。

「あー、ドライドさん、チリも積もれば山となるってな感じだね」。

「ほー、賢いのおーシユンは」。

「嬉しいです、そう言ってくれたのはドライドさんだけです」。

ドライドさん、ちらつと俺を見て。

「なんと、残念な子だったのか」・・・そんな声が聞こえた・・・
う~~~~。

運の良い事に、調理人ギルドは同じ防護壁の中に有った（作者の都合だよ）。マスターなマカズさんと、調理人のドライドさんに挟まれて、ザリガニは食べられるを登録しに行った。

「とっ、言う事は。食べられる魔物魔獣は他にも居るかもしれないよねって言う事に成ったが」。

食べたら死ぬかも知れない。猛毒を解毒する薬も、どの程度のとか、治癒や回復薬はどの程度とか。色々あって、特性を再確認してから食材に使えるとして等が有って、提供は無理となった。

ドライドさん曰く・・・「シユン、君の独壇場だよ。魔物や魔獣を食いまくれ」・・・無責任な。

宿に帰ってきて。「この宿はね、跡継ぎが居なかった老夫婦に譲ってもらったの。あたしもマカズももういい歳でしょ、何時までも魔物や獣と戦って居られる訳じゃないし」。

部屋数色々合わせて七十程、満室に成ればこの人数でのやりくりはきついのではないかと思う。

「ベッドシートや掛け具は毎朝交換するけど、掃除は頼まれなければしないのよ。色々魔法具なんか有って、掃除中に何かの拍子に発動したら大変な事に成るしね。部屋が空いたら掃除をするの、魔法を使っただから直ぐに終わるし。でもシユンは使っちゃ駄目よ、きちんと制御が出来る様になってからお願いな」。

「今夜はシユンの歓迎会だ、未だ子供なお前に酒は飲ませられないが。ドライドに腕を振るわせてごちそうを作らせるぞ、その後はゆっくり休め」。

そうマカズさんに言われて、俺の眼に又うるうると水が溜まる。

マカズさんは苦笑して「俺達夫婦には子供が居ない、どちらがどうなのかは分からないがそれは運命だと思っ居る」。

出来ない事は当たり前にしないが、出来る事をするのが大人の子供への対処だと俺達は思っ居る。さっきちらっとパミーとに言われたんだ、お前は俺達夫婦二人に、神様がしばしの間預けた子。そう思いましたよとな。

この優しさは何、俺はその言葉を聞いて。改めて号泣した、俺の泣き声を聞いて皆が集まった。

知らずに握った拳を、噛み砕かんばりに噛みつき泣く俺を。皆が抱きしめてくれているのを感じた、その後、気絶するように意識をなくした俺をベッドに運んだのは誰だったのだろうか。

「捨てる神がいるなら、拾う神もいる・・・本当なんだ」

「ああ、その通りだ」

「誰」。

「君をこの星に捨てて行った誰かと、との同じ立場にいる者だ」。

ラーソーの町 宿の中で（後書き）

あゝ、この星の神様との邂逅でしょうか。

ラーソーの町 宿 神様らしいのと知らない天井（前書き）

マカズ夫婦が経営することになった宿は、商店やギルドが有る第三防壁に有る。シュンが気絶したので歓迎会は中止、改めてスタッフが揃った段階で改めて行う事にした。

パミーはシュンの身体のサイズを測り、古着屋に行つて来ると出て行った。

「店で着る物とふだん着る物、戦う時に着る服も居るわね。あの格好だと普通に浮浪児じだわ、見た目良い子だから選ぶのが楽しみね」。

「全部揃える気なのか、やっぱり本人を連れて行つて着せて見るのも良いと思うぞ。その方が二度美味しいと思うがな？」。

「はあ、解つて居るわあ、好きよあ・な・た？」。

ラーソーの町 宿 神様らしいのと知らない天井

俺は夢うつつで。

「捨てる神が居れば捨つ神ありつてか」そう呟くと。

「その通りだな。まっ、君の心中では私は捨つた神にはなれんだろ
うがな。私はこの世界を管理する者だ、ここは私の世界だけれど。
君を此処に捨てて行ったあれらとは格の違いで、あれらに文句も言
えないのだ、情けないが格下つて言う意味でな。」

ですが、こう言ったら色々思われるでしょうけども。君の力と能力
は私が管理するこの世界には大きすぎなので、暴走されたら私の管
理世界は破滅します。まあ、具体的にどうするかはこの星の神と相
談して変更しようと思います。まっ、そういう事でよろしく。

本当なら理違いと言う事で、あれたちに知れない様こっそり君を始
末する心算でしたが。それではなんの落ち度のない君が、余りにも
それは不憫とこの星の神と話し合い。能力下げらるって言う事で、君
の存在を認める事にしました」。

「まっ、現在のHP・MPのレベル量は認めます。なんであれ、戦
つて手に入れた事には違いありませんね」。

ギルドレベル 1

装備無 個人レベル 47

HP 47000

MP 23500

「君はこの世界に目的を持って来た訳では無いので、ステータスや

スキルは余り意味は無いでしょう。魔法で好き勝手にいろいろできる訳だし。

君は別段勇者や神子等ではないし、又そんな存在は私共も必要ありませんしね。魔物だって本来はこの世界、この星には居なかつたのです。魔物もあれらが勝手に置いて行って、それで増えたり進化したら合成したりとか。

その結果なので、迷惑千万なんです私と星神にとってはね。君は殺されないだけの防御力、戦えば保々一方的に勝利できる剣技と魔法、万が一食べられても魔物にとって君は超不味い者、なので食べられることは有りません。例えば君が死んで居てもね、飛んでもないイレギュラーなんです」。

ため息を吐くこの世界の神。

私の制限は「全部の魔法・火・水・風・土・雷・光・闇・の下級上級使える」。但し、大規模戦略級の殲滅魔法は使えない。戦術殲滅魔法も、半径500メートルまでの魔法に制限。創造魔法は、生命以外は何でも作れる、制限は生まれた世界の物だけ。但し召喚魔法を使える様にします、召喚魔法で呼べるのは、生き物以外で縦横奥行共に君の背丈ほど。付与魔法は蘇生以外なら許可し様、治癒魔法もしかり蘇生は禁止、死んで居なければ助けられる魔力はあるしな。

本当にあれらは無茶苦茶な事を、君の責任では有りませんが協力のほどよろしく。

そう言うとスッと消えたと言おうか去つたと言おうか、そのタイミングで俺も目が覚めた。昨日は途中で気絶しちゃったもんな、歓迎会が飛んじゃっし・・・なんかはずいです。

あつ、俺にとつては俺を拾った神つて。俺自身は当然マカズさんとパミー夫婦に決まって居る、別にこの世界の神等とは思つて居ないし。

知らない天井を見ながらそう思つて居ると、誰かが扉をノックしている。慌てて起きて返事をする、着の身着のまま寝かせられたようで、なんなんだ俺はと思つた。ドアを開けるとマカズさんが立っ
いて。

「おう、起きて居たか。朝食を食べたら仕事を教える」。

昨夕の事は無かつたように、そう普通に接してきたマカズさん。きつと皆もそうしてくれるだろう。マカズさんがテーブルを指さし、それは着替えだ、黒い方が店で着る服だが。まだ本式の開店は少し先だ、だからそっちのポケットが沢山付いて居る方の上下を着て着いてこい」。

宿は、食堂と言おうか酒場と言おうか。大き目の扉を境に、入ると左に宿の受付。階段も左に有る、その場所が宿への入り口だ。宿の食堂兼酒場は道路側は窓ガラスがある、宿の方は二階以上は窓ガラスが有るが一階は無い。ある意味其れなりの無賃宿泊防止と思われる、二階から窓下には釘板が並べてあつて、飛び降りるとブスつと
。。。。

厨房は食堂兼酒場をカウンターで仕切つて有り、広さは結構広く、

日本風に畳数で言えば三十畳程はあるだろうか。肝心の食堂兼酒場の広さは、七十坪と広い。

「大雑把に言えば、伯父さんの所のDVDで見た、マカロニウエスタンとか西部劇って言う奴に出て来る酒場。そんな感じだ」。

遅めの朝食を取っているとマカズさんがモップを手渡してきた、ここを一人で掃除しろと言いたいらしい。

「明日お前はギルドに行つてクエストを受けて来い、店の方は習うより慣れるの方針で行く。日が無いから仕方が無いって言う事さ、が、怪我はしないようにな」。

召喚魔法・・・研究したら地球に帰る魔法作れないかな。

ラーソーの町 宿 神様らしいのと知らない天井（後書き）

あー・・・めんどくせえ、もう挫折しそうだぜ。

ギルドでクエスト探し・・・仲間は出来るかな!?(前書き)

リンカさん、それはある意味不味いっしょ。

ギルドでクエスト探し……仲間は出来るかな!?

昨日、マカズさんから言われた様にギルドに来た。もっともその前
に通りが掛かりに有る靴屋で靴を買い、武器屋で補助武器の大型ナ
イフやら投げナイフを買った。アクセサリ等、補助の物を売る道
具屋はギルドの正面に店を開いていると教えられている。お金は魔
物から取得した物を売って換金してもらった、金貨12枚……実
感としてゲーム内通貨な感じで心もとない。

両手使用の長剣を左腰に背には弓、右腰に矢筒、後ろ腰に大型ナイ
フ。両肩から投げナイフ用のベルトを掛けて、なんとも歩きにくい
様な格好だ。其れでも槍や斧は持つのを断った、これでも、女性陣
にあのねあのねと、心配だからあれもこれもと持たせられそうにな
って逃げただけどね。俺としては弓は要らない、魔法が有るから
マジで要らないと言ったのに押し切られてしまった。パミーママさ
ん何故笑う。

防具を着けて居ないのは、薬草取りに行くのに防具は要らない。戦
いたくないから逃げるし。そう強固に言い突っぱねて出てきた、こ
れ以上重くされて堪るか……もっとも重量なんて関係ないけどね。

「でっ、今ギルド」。

「シユン、誰に言っている訳」。

「何となく言ってみただけですよリンカさん」。

「変な子ね。まあ良いわ、でっ、クエスト受けに来たのかな?」。

「ハイそうです」。

「だったら向うよ」。

リンカさんはそう言って番号が付いた掲示板の様な物が並んで居る方を指さした。

「君の実力だとレベル5辺りまで受けられるのだけど、飽く迄ギルドレベル最優先だからね。今のレベルより一つ上までね、ギルドレベル3までは初心者レベルだから三回までクエスト失敗は許されるわ。流石に四回以上は罰金ものだけどね、魔物の存在に付いては調査はしているけど、よくよく気を付けてね。調査漏れの魔物に襲われて怪我をしたら、ギルドが無料で治療するわ。クエストを受けられるまでの食住も保障する、けど注意して、無理に戦って怪我をした場合はその限りではないからね」。

「はい、分かりました。でも俺の場合はそれ不要かも、自分で治せるし」。

「あはは、そうなんだあ。じゃあ誰か新人仲間と連れ立っていったら私らも安心なんだけどね」。

んっ、リンカさん、俺を何気に気軽に使う心算なのかな。あー、放って置いたら俺的に拙い事に成る成るよね。だから・・・

「其れを承知すると俺に何か良い事は有るのかな、俺は単なるお人好しには成らない心算だけど?」。

「ギルドランク上昇効果が有ったりして?」。

「別に俺は仕事も持って居るし、そんなの必要ないけど。むしろ俺の今の状態がギルドにとって損をする感じなんだけど?」。

「えっと・・・それは」。

「詳しくはリンカさんが考える事です、俺がなんか言ったら多分只では済まない気がしますが」。

って言ったら、リンカさんは色々と改めて考え出したようです。大変ですね、只の受付って思って居たら本当にただでは済まないって事に。

「・・・あれっ、俺ってお小遣いの必要が無ければ。ギルドのクエスト受ける必要もないよね」。

んー、パミーママさんに相談し様。あっ、俺帰るね。

「待ちなさい、ギルドカードは伊達じゃないのよ」。

ド湯事・・・あっ、どう言う事って聞けば。

素材が安く手に入るって、まじつまんねえし。

「俺っが直に行って取って来ればいいだけじゃん、・・・無意味だけど」。

なんで無意味って聞くから言ったんだ。

「空っからに成った魔石を拾ってきて、魔力を流して売れば事足りるし」。

何か物を作って、生活費を稼げば物凄く安全ジャンそう思ってたよ。

ギルドの建物から出たら、何やら通行人が空を見上げて騒いでいる。

「空飛ぶ魔物が居るって聞いてねえし」。

翼幅六メートルは有るだろう禿鷹な感じの奴が三匹飛んでいる、見渡せば弓を持って居る者は攻撃しようとしている、慌てて俺も弓を構え矢に風の魔法鎌鼬を付与して射る。

命中はしたけどなんの効果も無かった「当然か、鳥だし風属性だよな」。

なので、意識してにハゲコウを指さし「イオラ」って言ったら燃え出した、マジっすか。

ドラ エの呪文が使えただ、他の二匹も誰かの魔法で落された。

「シユンは珍しい魔法を使うのね」。

何時の間にか傍に居たリンカさん、追及されなくなかったら・・・
って言う様な顔をしている。このまま立ち去る事は無理の様。

「何か良いクエスト有りますかね」。

「今の時間だから、川近くで水草系の薬草取り位なら有るかもね。但し見知らぬ仲間と一緒によ」。

「あゝ、どうしてもそうなるんだな」。

掲示板の前には、同い年か少し下位の男女二人ずつ四人立っていた。武装もしないで「嘗めてんのか此奴ら」って思ったが、どうやらそう言う訳でもない様だ。女の子の方は流石にそうでも無いが、男の方は臭い立つって言う感じ。此奴ら二人、何時風呂に入って何時服を洗ったんだ。あーやだやだ、近寄ったら絶対声を掛けて来るだろうな。

案の定、女の子の二人から声を掛けられた。

「あの、わたしリリツツって言うの、クエストを受けるんですけど私達四人を同行させて下さいませんか」。

そう声を掛けて来たのは背丈は俺位の痩せ細った少女、顔はそこそこ整っているが、そばかすが鼻の上に散らばっている。

「わたしはリニー、お願いします」と、そう言った少女は俺の唇位までしかない小柄な女の子。浅黒い顔と肌をしているが可愛い顔立ちだ、多分二人は孤児院で暮らして居るのだろう。男の子二人は俺の耳位までしかないが、浮浪児ですって言うのが丸わかりな奴ら二人だ。

「俺はニツク、此奴はリヨシユーって言うんだ。リヨシユーは少し

言葉を口に出すのが遅いんだ、勘弁してやってほしい」

ニツクは磨けば其れなりに良い顔立ちの男の子、気だならしいのが残念君と思う。リヨシユーは浅黒そうな顔を垢だらけで悲惨だ、鼻が少し曲がって居る、多分暴力を振るわれたせいだろう。

・・・そう言って四人が頭を下げて来た、お互い顔見知りなのだろう、多分孤児院の元仲間か。

「良いけど、何か良さそうなクエスト有った」。

そう四人に聞くと、四人とも俯いた。

「あー、字が読めないんだ。分かった」。

掲示板を見ると、リンカさんの言う通り川辺での薬用水草採りしかない。

「なんで薬用水草採りのクエストしかないんだ、訳を知っているのかな？」。

ニツクが答える。

「ズサーって言う淡水の魔物が居るんだよ、話じゃ大きいので十六メートルも有る奴が居たって聞いてるけど。普通十メートル前後の、でっかい口をした魔物だよ、充分俺達なら一口で食われる」。

「後は痺れさして獲物を食べるモンシーって言うのも居るよってか、川に行った事が無いの」。

そうリリッツが言う。

「火炎ザリガニと戦って勝った事は有るよ、まっ、集団戦だったけど」・・・うそは言ってる居ない。

「ゲツ、マジか。あれって触角を鞭見たいに振り回すし、雷属性か水属性の氷の槍でも急所に当たらないと倒せないって聞いたぞ」。

「その話は後にしよう、兎に角クエスト行かなきゃ君達ご飯食べられない見たいだよな」。

そう言いながら、人数分の薬用水草採りのクエスト用紙を掲示板から剥がし受付に行く。

「五人で行きます、依頼は同じ物が五枚ありましたからこれを受けます」。

「あら良かった、中々ね、これを受ける人って少ないから。五人でなら互いに見張りあえるし、大丈夫よね」。

「多分ね」。

ギルドでクエスト探し・・・仲間は出来るかな！？（後書き）

リンカさんに尻尾が無いのは嘘、下着の中だって。

ん、お昼ごはん食べる。(前書き)

一応クエストを受けたけど、・・・ため息しか出ないのね。だって
彼ら四人、食べてませんを全開なんだよ。

ん、お昼ごはん食べる。

川が有る郊外に出る為、俺はスタスタと歩いていたが、後ろにいる四人はトボトボ＋十な感じで付いてくる。食べて居ないのは丸わかり、もう少し行くと食べ物露天が有るらしい。

「ねっ、此処でお昼ご飯にしない。お昼ごはんには早いけど、外郭にでたら食べ物屋は少なくなるんだったよね」。

「食べるんだつたらお前だけ食べたら、俺ら買い食いする金なんて持ってねえし」。

「へえ、ニツクは正直なんだね、ちつとは見栄を張るかなって思ったけど」。

「そんな物、くそ虫に何度食わせたか」。

「そこいらに生えている何かを食べる予定だからな？」。

「そんなに都合よく食べ物有るのかな、有ったとして君達全員が満足するほど得られるの？」。

「正直分らない、けど、当てにしなければ歩く気力も湧かないよ」。

「分かった、兎に角歩く気力が湧くかもしれない程度に、俺が食べ物君達に食べさせるよ」。

「哀れでしょうがないからか」。

「馬鹿を云え、途中でお前らに何かあったら俺の寝覚めが悪いって言うだけの自己満足さ、気に入らないかい？」。

「あからさまにそう言われると何も言えないな、哀れなのは事実だし」。

「所で、お前達って何も武器や採集籠とか袋とか？。何も持って居ないけど何故なんだ？」。

「入れ物は向こうに着いたら草を編んで作る、武器は元々ないから」。

「えー、どうやって身を護る心算さ、俺はお前達を同行するのは拒まなかったけど。守ってやるなんて言っていないぞ、ハッキリ言ってるんな心算もないし義理も無い」。

「いいんです、何かに襲われて怪我をし、動けなかったらそれはそれで仕方の無い事です」。

そう言ったのはリリッツだ。

「それは別な意味で寝覚めが悪いね」。

「構いません、誰も泣いてくれる人は居ないし。所詮浮浪児の俺らだから、見苦しいのが居なくなって清々する人の方が多いと思うよ」。

これはリニー、見た感じから初歩の魔法を使えそうだ。

「リニー、お前って魔法を使えるよな。だったら其れなりに稼げそうだけど、やっぱり仲間を見捨てられずに貧しているのかい」。

「違う、あたいが使える魔法なんて攻撃が一つ、防御が一つ、支援用付加が一つ。しかもどれも初歩魔法よ、どうやって稼げって言うの、この程度なんて五歳の子供だって使うわ」。

その科白を聞きながら、歩いて居ると。なんだかドロツとした飲み物らしいものを売っている露店があった、売り子はなんだか目と目の間が随分と離れているお兄さんだ。

「兄さん、五人分くれ」。

「あいよ、一杯50ジエン。五つで250ジエンね、入れ物は使い捨てだから気にしなくていいからね」。

そう言われて手渡された飲み物、シネマのコー○コー○のLカップに入ったアボガドジュース・・・違ったね。確かに上はドロツとしているけどその部分はとろりと甘く、下は何だろっ、色的に変だけどレモン水。そんな感じ、舌で上の甘いものを舐めて、下のレモン水のような物で飲み込む。かき回す棒見たいなのが付いて居る。

「いきなり質量的に重い物を食べたなら動けなくなるだろうからさ、順次軽い物から胃に入れて行こうな」。

「シ・シユンで、や・優しいのか冷たいのか分からないも・物言いする人だよな」。

兄さんからカップを受け取りながらリョシユーが言う。

「リヨシユー、今ここにお前達と一緒に俺が居る。そして俺はお前達に飲み物を奢って居るよな、其れだけで十分俺はお人好しだと思っが。どうか、ニック」。

「確かに、ギルドの規定は守らねばならない。が、しかし例外を上申する者が居た場合。関係者は真偽の会議を開き、その結果認めるならば良しとして有る。あの少年は、例外とすべき者で有るな、上申すべき者の一人であるリンカ、弁明をよろしく」。

ギロリとリンカさんを睨んだギルド長、ウリーネ・ホンタ62歳。ちなみに百合な人。ハゲコウって俺が呼んだ鳥、落したのは良いけど、リンカさんにとってはそれが非常に拙い事に成って居る様だ。

ギルド長の向かいに座るギルド長補佐「ホオー、駆け出しの小僧だが。戦闘力はレベル47、でもギルドランクは1・・・か。それにこの値はなんだ、人間か此奴は」。

このままでは拙い、あたしの立場が無い、マジで不味い。

「確かに、その年齢でその能力ですが。ただ、少年自身に記憶喪失か混濁かの症状が有ります。この場合、こんな能力が有る少年ならば、所属していた街のギルドから行方不明の者の照会が有る筈。しかしながら身なりから、幾ばくかの金は必要であると思いました。ただ同行して来た人物が、ギルドレベル七のマカズ夫妻でした。夫

妻が開業する宿で雇うと言つ言葉も有り、ならば少しでも危険なクエストからは外し、しばらく様子を見様と思いました」。

「成る程、まっとうな言いぶんじゃな。とは云え、それを判断するのもギルド幹部会議じゃ。じゃが明らかに過ぎたる行為、受付の職務の者にその様な判断を等求めて居ないはずだな？」。

「ギルドマスターが怒るのは分かるし、正面入り口の受付がする判断でも無いとは言えるが。相手は子供だな、いい大人が子供に危険な事をさせるのはどうかと思う。なので、軽微な規定違反として叱責でどうか」。

「貴様、その半分投げやりな事を言つて立場を捨てたいか」。

「何をそんなにカリカリしているのか知らんが、優秀な職員を失いたくなければこの位が妥当だろうなと、俺は判断するがな。其れともお前はリンカを冒険者へ戻したいのか？」

「其れは無い、だが最近立場を外した言動が過ぎる、これを機会に少し絞め様と思っただけだ」。

「ほー、ギルドマスターの嗜好は入って居ないのだな？」。

「ば、馬鹿を云え、それ程虚けてはおらんぞ・・・こ、好みの容姿ではあるが・・・」

「そうか、ならば良し。少年本人も居ない事だ、帰ってからもう一度話そうか。いいなリンカ？」。

「ハイ、解りました。帰って来ましたら連絡します」。

「ふん、ギルドマスターのおっしゃる通りにします？だよね」。

「身を護る武器が何もない、リニーが初步魔法を使えるだけ、死に行くつもりかよ」。

「シユン、俺達は半分そんな感じなんだよ。もう三月もしないうちに冬が来る、もう大人に随分と近づいて来た年齢の俺達。だから俺達は、もう大人達の保護や憐みを受ける機会は少ないんだよ。この冬と来春を凌げないと、大人として稼げる前に死ぬしかないね」。

そうニツクは言う。そしてリニーが言う。

「大人になったからと言って、仕事にありつけるかどうかなんてわからないわ。精々が所、誰かに捕まって売られるかも知れないって事よ」

「娼館なんて嫌よ、知らない好きでも無い男に良い様にされるなんて、絶対嫌」。

小さくリリッツが叫ぶが。

「そんな選択権は、俺らに有る訳ないだろう。さしずめ俺なんか奴隷だな、身動きもうめき声も出せない様にされて、何処かに運ばれてよその国に売られるのさ」。

諦めの表情でニックが言う、どだい浮浪児、裏世間を見てきた彼ら。それが運命と思って居る。

「将来それが本当になったからと言って、今の俺には関係ないし今の状況にも関係ない。所で、リリッツは弓は扱えないのかな」。

見回目細くてひよる長い、そんな感じのリリッツ。観察していて気が付いた、意外と筋肉質な事に。

「ギルドの射場で、三度ほど射らせてもらった事が有ります」。

「結果は」。

「三度目には七十メートル的に、十本中九本当てられました。飽く迄も的にですけど」。

「じゃあこの弓を引いてみて」。

装備している弓をリリッツに渡した、言うだけあって余裕で弓の弦をひいて見せた。

「それじゃあその弓を装備して、中距離と遠距離は頼んだよ。攻撃対象が接近したら、複数本番えて撃てば効果は有ると思うよ。慣れれば三本は撃てるようになるそうだが、本当かどうかは知らないけど」。

ニックには後ろの腰に付けている、大型のナイフを渡す。

「ニック、接近戦闘職に成るけど大丈夫だよな」。

「今更怖いなんて大いにあるけど、何もしないで死ぬよりいいだろうさ」。

「結構正直って言うか投げやりだな、まっ、死なない様に頑張れ。」

そのナイフには火と風の魔法を付与してある、焼き切る事と風の魔法でスパッと対象を斬れるぞ、使い回せたらやる。リリツシユの弓には風、矢には氷の魔法が付与してある。リヨシユーには何か特技は有るのかな」。

「

ん、お昼ごはん食べる。(後書き)

上司には、謙譲語・・・んー知らんし、適当かな。

読んでくださっている方々にお詫び申し上げます、今のこれを全面的に書き直そうと思います。題名も違えて書くつもりです、素人が書いて居る物なのでどうぞご勘弁を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8448w/>

攫ったのは白

2011年9月29日16時39分発行